

博物館のもつ教育力

——同志社にふさわしい博物館の設置を——

博物館と個性的な企画

このところ博物館や美術館の企画展が話題をさらっている。

春先から秋口にかけて近隣でおこなわれた展覧会のうち、主なものだけでも「祇園祭大展」「インドの仏像とヒンドゥーの神々」「装飾古墳の世界展」「弥生の祈り人展」「横山大観・菱田春草展」「東洋陶磁器名品展」「大唐長安展」などと多彩である。

これらの展覧会は、すべて個性的で印象強く脳裏に焼付いている。強烈な印象を残す展覧会は、実物のみが持つ質の高い圧倒的な存在感と、組織的で体系化されたディスプレイ

鈴木重治

(大学校地学術調査委員会調査主任)

によるところが大きい。ときには、関連資料や補助的な解説資料をたくみに展示に取り入れられたり、思いがけないジオラマなどにも教育的配慮が見られ、心にくいものを憶えたりする。研究水準の高さに裏付けられた展示は、感動的ですからあり、教育的でもある。

私的には、考古学に加えて美意識や祈りにかかわる展示に関心を持っているが、展覧会への関心は、万人に差のあるのは当然で、主催者への期待も千差万別である。しかし、博物館・美術館の設置者や主催者の如何を問わず、展覧会それ自体には特定の目的やねらいがあるのはこれまたあたりまえである。一方、観覧者は観察者でもあるから、主催者の意図

とは別に、多様な受け止め方や自由な評価を与えることができる。したがって、評価にも差が生じることになる。

多様な評価が予想されるからといって、展覧会の企画に当って重視されるべきは、当りさわりの無い軽薄な八方美人的なものでは決してなく、内に主張を秘めた獨創性であり、品性の高い個性こそが求められることになる。つまり、博物館活動の評価の基準の一つが、教育・研究に支えられた個性的な企画にあることは無視できない。

博物館の個性は、歴史的に畜積された力量によることもあるが、企画段階からの自由な討議と建設的提言を受け入れる包容力と、組織化された資料の収集力などが、豊かな個性を生み出す上で重視される。いわば、博物館の持つ教育理念と、個性的な運営の姿勢こそ、観覧者は評価の基準を置き、展覧会を通して博物館を評価するわけである。具体的には、博物館独自の歴史遺産や多様な物質文化資料の活用に向けての取組みが、どのように「ものに生命を与えるか」を課題として、独創的で豊かな個性に満ちた展示であるかどうか、質の高い観察者の評価規準の一つとなる。

以上のことから、水準の高い博物館は、すぐれた個性と豊かな企画力を持つことによつて魅力ある展覧会を市民の期待に答えて提供しながら、独自の研究成果を展示によつて発表すること、地域の教育力の一端を担っていることになる。

つまり、博物館の存在は、その設置者が地域であるにしろ大学であるにしろ、その存在が教育力のバロメーターともなり、畜積された特有の研究成果を個性的な企画によつて社会に還元する上でも、極めて有効な教育機関ということになる。

海外の博物館に学ぶ

校祖新島襄が留学したアーモスト大学には、七つもの専門博物館があるという。図書館や研究室の図書と共に、博物館が保有する各分野の研究過程で畜積された物質文化に関する基礎資料が、大学の教育・研究にとつて欠かすことができないものと認識されているからであろう。

欧米では、大学が博物館を持つことは当然のことで、むしろ大学間の共用施設としてば

かりか市民への解放が推進されつつある。これらのことは、アジア各地の大学設置博物館の現況をみてもらうがえる。

中国や韓国に於ても、大学に博物館はつきものとされている。それは、国によつて大学の設置規準に博物館を設置することが規定されているからでもある。大学の機能をより有効に生かす上で、博物館が重要な位置を占める施設であることを社会的に認知されている証拠でもある。したがつて博物館のない大学はない。

中国の例をみよう。北京大学の博物館をはじめ四川大学や西北大学など各地の大学博物館は、専門分野の研究成果の上に立つて教育・研究活動を展開しているが、厦門大学の人類学博物館では地域とのかかわりを強く持つている点で、伝統的な個性が指摘される。

同志社大学と姉妹友好関係にある西北大学の場合は、大学の組織を改めて歴史系の学部に対応する文博院を独立させた。文博院とは文物博物院のことであり、出土資料を中心とした考古学関連の研究展示室も含まれている。この展示室は、三室から成つていて黄河中流域の石器時代、商周時代、秦漢・三国・

六朝・隋唐時代の基礎資料が収蔵・保管されている。ここでは、大学の教育・研究を推進させるのが目的であり、陝西省歴史博物館や碑林博物館など世界的に著名な西安市内の博物館とは異つた活動をしている。つまり、大学が分担している学術的な基礎研究に重点がおかれ、いわば博物館のもつ社会教育的な分野は、省や市が分担して市民とのパイプとなつている。

市民との提携が進んでいるのは、香港やシンガポールである。香港大学の設置している馮平山博物館は、青銅器や陶磁器についての研究を進める中で、市民や海外からの来訪者へも研究資料が提供されている。シンガポールの場合は、市民による展覧会の企画すら見られる。ここで見た「唐——シルクロード展」は、日本では見ることの出来ない質の高い展覧会であつた。北京政府をはじめ中国各地の大学や博物館が協力して開催したことが国際的に評価されたゆえんでもあるが、とりわけ市民でもある華橋の力が如何に大きいものであるかをよく示していた。会場に入つての印象は、まず耳にやさしい音楽と共に、タイムスリップしたかのように、時空を越えた世界



香港；馮平山博物館
(香港大學)

へと導びかれたことだ。テーマ毎にまとまりのある展示品は、次々に中国の一級文物が登場し、量感と共にゆっくり観察できるよう配慮されたディスプレイは、変化を持たせることで楽しくさえあった。しかも移動しながら次のコーナーへの期待を持たせるなど、教育的な企画が評価された。

ここで重視してよいのは、香港大学の例が、

馮平山氏を中心に大学の卒業生から寄贈された文物を主な資料として運営されているのに対して、シンガポールの場合は、地域の住民である華僑を中心とする市民によって運営が支えられていることである。

博物館の運営にみる特徴は、お国柄ともいうべき個性を示す場合がある。アジア・アフリカにしばって見ても、インドネシアはオランダの、インドやマレーシア・スリランカなどは、イギリスの影響が強く、東アフリカのケニアやタンザニアは、イギリスやドイツのスタイルが受け継がれている。これらは共通して、植民地時代の歴史的建造物が主要な博物館として利用されている。

具体的にみると、インドネシアのパサリカン博物館は、十八世紀初頭のオランダ東印度会社の倉庫を活用しており、マレーシアのクチン博物館はイギリスの提督の邸宅をそのまま利用している。植民地時代の歴史的建造物群が林立するインドのボンベイでも、ブリンズオプウェールズ博物館は、その庭園と共にイギリスそのものの感さえる。しかも地域を対象とする共同研究の進め方にも、イギリスやオランダの影響がうかがえる点で、歴史

的遺産の大きさを知ることができる。^{註2} このことは、東アフリカのケニアやタンザニアの博物館活動の中でも確認できる。その典型はナイロビ博物館の歴史的な共同研究の進め方である。人類学者リーキー博士夫妻の研究を受け継いだ共同研究は、多くの大学の協力のもとで親子三代にわたる息の長い研究として知られている。アウストラロピテクス・ボイセイの発見をはじめ、人類の起源に関する基礎的な研究の積み重ねには、敬意を表する以外は無。オードバイ峡谷の現地に建つ、季節的研究室で見たイギリス、アメリカ、ケニア、タンザニアなどの若い研究者の共同研究が、和気あいあいのうちにも、真剣なまなざしで化石人骨や動物化石の整理に打ち込む姿には、感動すら憶えたものであった。しかもリーキーがケニアの国籍を取り、現地の住民と共に誇りと自信をもって博物館の組織する研究活動を展開していることは、地域にとっても貴重な意義を持っている。ここでも、博物館の研究活動が地域への教育力となっていることを知ることができる。

アジアとアフリカの一部の博物館を見ただけでも、大学の設置している博物館を含めて

歴史的な建造物を活用しながら個性的な教育・研究の場として、独自の活動を進めている博物館の多いことがわかる。しかも、歴史と文化、自然と環境にやさしく触れつつ理解を深める場として、きわめて有効な教育機関であることを示している。とりわけ、海外の博物館から学ぶことは、人、物、技術、祈りを含めた思想などの多様な交流から、あらためて人類の過去と未来を考え直す場が持てるということであろう。

つまり、大学が博物館を持つのは当然であり、また博物館は、大学の機能の一端を担う上で、欠かすことのできない教育・研究施設となっていることを、海外の博物館は教えている。

同志社宗教博物館と総合博物館構想

かつて、同志社にも博物館を設置して教育・研究に資したいとする構想があった。

その一つが「同志社宗教博物館設立之趣旨」として明治二十六年に、当時の同志社神学校の湯浅吉郎、松山高吉、M・L・ゴードンらによって発表されたものであった。その趣旨

は、「宗教の研究は、単にその教理や思想を探るのみでは決して十分でなく、それぞれの宗教礼拝、式典、習俗などの実際に即してその実相を知らなければならぬ。そのためにさまざまな宗教にかかわりのある新旧の物品を収集・展示して研究の資（註）としたい。」というものであった。

湯浅吉郎ら同志社神学校の教員らの願いに答えた多くの卒業生や有志から贈られた資料リストを見ると、すでに河野仁昭氏が指摘したように、地域や時代を越えて多岐にわたるものがあつた。しかも、キリスト教に限ることなく、仏教、道教、儒教にかかわる宗教関係の資料に加えて、神社関係の守札や鏡といったものまで宗教博物館に寄付されていることが明治三十七年二十九日付の「宗教博物館図書及物品調査表」などからうかがえる。

明治二十五年から準備された宗教博物館構想は、明治二十六年に入って湯浅、松山、ゴードン三氏による提案をもとに同志社社員会の承認によって「同志社宗教博物館」としての個性的な活動を開始したらしい。ちなみに、宗教博物館に関する費用は、別途寄附金を募集し、又は、同志社経費外特別の金員を以て

之に充つることとされ、明治二十六年以降明治四十二年までの十数年間にわたって資料の寄贈を受け入れていた。しかし、明治三十年代に入ると、日常的な資料の整理や保管さえ、神学校の生徒や学生の奉仕にゆだねざるを得ないような状況に置かれたようである。つまり、すぐれた構想であっても、組織的には、当時の不十分な運営によって崩壊せざるを得なかつたわけである。

当時同志社に寄贈された博物館資料は、総数五百五十点を越えるというが、照合不能の資料があるとはいえ、現在なおクラーク館前の植込の中に屋外展示されている石造臥牛をはじめ、学内に保管されている資料のあることは、同志社の歩みの中に記録されてしかるべきことであろう。専門学校令による同志社大学が開校した明治四十五年、やむを得ない教室事情と図書の分置が宗教博物館の終焉につながつたとすると、湯浅らの初期の博物館構想は、宗教博物館を生み出す以前に、大学を開校する為の犠牲となつて姿を消したことになる。

なお、当時の資料寄贈者の中に、人類学や考古学の先達であつた鳥居龍蔵や、中村栄助、

柿本義円、鈴木彦馬、小崎弘道ら同志社関係者の名が見えることは、少数民族を含めた生活文化史をも視野に入れていたことをうかがわせ、構想としても今なお受け継いでよいものと評価されよう。これが同志社の初期博物館構想であった。

陽の目を見なかつた同志社の博物館構想といえ、大学の田辺移転が検討される中で計画された同志社総合博物館構想もその一つであった。この構想の中で作成された博物館本館の建築設計図面によると、展示室には、三つの柱が検討されていた。一つが同志社の社史資料室関係であり、他の二つは、自然史関係の加藤延人コレクション及び急速に蓄積されつつあつた考古学関係の出土品である。青写真を見ると、展示室以外に収蔵庫や研究室をそなえたもので、博物館活動の基本となる資料の収集・保管・展示の為の空間が、教育・研究に生かされるよう配慮されたものであつた。二十年程前に、理事長室で初めた見たこの青写真は、一部の関係者によつて検討されただけのものであり、学内の討議が充分になされないまま、構想としても消えてしまった。記憶されている関係者もおられると思

うが、同志社の田辺校地の一角に保存されている天神山遺跡の周辺に、「同志社史跡公園予定地」と書かれた標示板がいくつも建てられていた。そこが同志社総合博物館の建築場所との説明であつた。現在の国際高等学校の男子寮や女子寮のある地点に相当する。

この「同志社総合博物館構想」も、大学の一部が田辺へ移転する中で消えたことなる。構想自体が大学の教育・研究に資するたためであつても、教授会をはじめとする学内の正規の機関で、正当な手続きを踏んだ上で検討されないことには、構想倒れになるのは当然である。しかも肝要なことは、同志社らしい個性と、その力量に応じた計画の内容を検討の段階でオープンすることであり、それが欠如しては結実しない。

つまり、全学的な叡智と、卒業生を含めた同志社を支える良心を信頼して、同志社らしい個性的な構想を持ち、強い意志をもつて博物館を設置する為の着実な作業に入ることが必要である。

現在の同志社は、博物館を設置する上で必要なさまざまな条件を、すでに保有している。博物館法の規定する法的な要件さえ、十分に

満たしていることは重要である。今、必要なのは、学内の手続を経て全学的なコンセンサスを得ることであろう。

同志社らしい個性的な博物館の設置に向けて叡智の結集が期待される。同志社が質の高い教育・研究を目指す上で、いまこそ同志社にふさわしい博物館が必要ではなからうか。

註1 鈴木重治「中国福建省の博物館と出土陶磁」博物館学年報第15号、1983年

註2 鈴木重治「マレーシア・インドネシアの博物館とその調査研究活動」博物館学年報第13号、1981年

註3 河野仁昭「同志社宗教博物館の顛末」博物館学年報第16号、1984年

※傍線は筆者による。
註4 註3と同じ

このぶどう酒はどこから来たか

新約聖書のヨハネによる福音書第二章に、「カナでの婚礼」の話がある。イエスが行なった最初の奇跡物語である。

ガリラヤのカナで婚礼があつた時、イエスも母と共に宴席に招かれた。ところが宴会の途中ぶどう酒がなくなつた。そこでイエスの母は、イエスになんとかしてほしいと頼んだ。イエスは、召し使いたちに六つの大きな水瓶に水をいっぱい入れるように言つた。彼らはその通りにして、それを料理頭の所に持つていったところ、それは最高のぶどう酒になつていたという話である。

「このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知

榎本栄次

(一九六六年神学部卒
敬和学園高等学校校長)

らなかつた」と記されている。召し使いたちは何を知っていたのだろうか。彼らは、「自分たちがぶどう酒を作つたのだ」とは思っていないだろう。そうではなく、「私たちは水をくんだだけだ。あの方が水をぶどう酒に変えたのだ」という事を知つていたのである。

私はこの話しがとても好きだ。自分の半世紀を振り返るとき、本当にこのとおりだと思ふからである。人生の一番大事なときに肝腎のぶどう酒が無くなる。これは自分の実力の限界である。どんなに頑張つてみたところで絶望でしかない。頼むものが何もなくなつた時、イエスにより頼むしかなかつた。困つたときの神頼みである。必死に祈つた。ぶどう

酒の要るときに、水をくむような作業しかできない。しかし言われたとおり六つの水瓶に水を一杯くんだ。

「それを料理頭の所に持つていきなさい」と言うから持つていくとそれはどんな酒よりも良いぶどう酒になつていったということである。私にとつてこの事は、本当にその通りであつた。

生い立ち

私の生家は淡路島で、今は無くなつてしまつたが洲本から福良まで単線の電車が走つていて、その途中の神代駅が私の家であつた。朝五時三十分の一番電車から夜の最終九時四十五分まで、切符を売つたりお菓子を買つたりする田舎の小さな駅を兼ねた農家である。七人兄弟の六番目として育つた。貧しくて忙しいながらも、楽しい温かい家庭であつた。朝起きると子供たちにはそれぞれ仕事が分担されている。布団を上げ、後を掃く者、拭き掃除をする者、駅の待合所と店の庭を掃く者、家畜の世話をする者、食事を作る者と毎朝どんなことがあつてもしなければならぬ。その後食事をして学校に行くのであつた。両親は店のこと、田圃のことと早くから遅く

まで一生懸命働いていた。勉強についても、仕事についても、怠けることは絶対許されなかった。

のんき者

それでも私は、どこか根本的に怠け者のようなどころがある。小学、中学時代と私のあだ名は「のんき」だった。よく物忘れをしてきたからである。学級費、学用品、宿題、持ち物等など忘れ物が絶えない。本人はそうでもないのだが、周りから見るといたって呑気者に見えるのだろう。図画とか習字の授業の時など、必要な絵の具や筆、用紙など揃っていたことはめずらしい。片身の狭い思いをしながら自然と人に頼ることになる。だから図画も習字も成績は「1」か「2」しかもらえなかった。だが両方とも好きで、今も筆を持つたり、旅先でスケッチしたりする。忘れ癖についてはほとんどそのまま持ち続けている困った習性である。

なぜ忘れ物をするのかと言うと、家が忙しいとかいづくか原因があるが、いつもぼーとしていたからである。ただこれは最近になって気が付いたことなのだが、ぼーとしていたのは、何も考えていないのではなく、何かを

考えるからぼーとしているらしいということだ。

たとえば、人間はいつたい何なのか。宇宙はどうなっているのだ、その端はどこなんだ。その端の向うはどうなんだ。僕ってどうしてここにいるのだろうか。父と母が結婚したのは偶然らしい。もし二人が結婚していなかったら、僕という存在はどうなっているのだろうか。ひよつとして僕の他の世界中の人は、劇をしているのじゃないか。僕のいない家庭ではまるつきり違っているのじゃないか、……：……：……んなことをよく考えていた。それらは今も続いている。

四六時中そんなことを考えている訳ではないが、誉められたとか、うまくやりたいとか、悔しいとか、叱られないだろうかといった気持ちの間に、こんなことを色々思うのである。ごく日常的な事なので、子供であるが故に根本的なことを問うたりする。

でもやはり、私はどうも生来、いい加減な人間らしい。「そこそこいい」と思ってしまった。一番になるうとか、一旗挙げてみんなを喜ばせてやるうとかいう事については、いたって消極的な人間である。憧れはするけれど

も、自分がそうなるうなどとは思わない。トップではなくていい、トップはしんどい。かと言ってビリもいや、「そこそこ」でいいと思っている。

ところが、この「そこそこに」というのは大変難しいことなのだ。「のんき」にしていると「そこそこ」になれると思っていれば、「そこそこ」はずごく頑張っている結果であるらしい。私はこれまでに度々「そこそこ」から突き落とされ、ひどい目にあつてきた。このそこそこ思考で真剣にならないから忘れるのだろうか。

進路

高校三年生の十二月。進路が決まらないので不安な時であった。私は淡路鉄道の車掌になろうと思った。どこかの農家の養子にならなうって親孝行してやろうと思ったのである。ちよど知り合いのおじさんが人事課長だというので、頼みに行くと「まかしとけ、大丈夫だ」と言ってくれた。ところが、結果は五人受験したのだが、三人合格して私ともう一人のM君は不合格になった。

その二、三日後、父が交通事故に遭った。伯母がそつと私に言った。

「栄次はん、キリスト教になつても何もええことないのう。おまはんは、就職あかんようになるし、お父さんは怪我するし。」

私は兄の影響で、高校一年生の夏から教会に行つていた。伯母に対して見栄をはつた。

「おばちゃん、神さんは僕をもつと大事なことに就かせようとしておられるんじや。それで就職を駄目にされたんじや。僕は大学に行くんじや。」

こうして就職は諦めて、立命館大学工学部の夜間部に入學した。兄の保郎が牧師をしていた世光教会に居候しながら、昼はアルバイト、夜、学校という生活である。ひがみと虚栄心と劣等感の混合のような青春の出発だった。兄は毎朝五時からお祈りを始める。大きな声で泣くような祈りで机を激しく叩いたり、時には、「あの栄次をまともな男にしてやってく下さい」などと怒鳴つたりする。ベニヤ板一枚隔てた部屋であり、寝ていられない。反発しながらもここでの生活が、私の人生を大きく変えた。金と名誉がすべてだった価値感が、違うものがあるのを少しずつ知らされる

献身

身内ながら、兄の説教は心に響いた。体を張っている生きざまが伝わってきた。牧師の生活は貧しいのだが、どの人よりも豊のものを感ぜさせられ、たくさんの青年が集まっていた。彼は言った。

「もし、充実した人生を送りたいと思うのなら、献げなさい。自分を献げないで、いい話だけ聞いていい人生を送ろうとしても、それはうなぎ屋の前で匂いを臭いでいるようなものだ」

それで私は、次の週の礼拝で思い切つて百円を献金してみた。するとどうしたことか、これまでの自分とまるつきり違つた自分が出てきた。嬉しくて嬉しくて仕方ない。こんなに嬉しいのなら今度献金が回ってきたら、その袋の上に座つてもいいと思つた。「どうでもいい自分だから。神様どうぞよいように使つてください。」

こうして私は献身(牧師になること)を決意した。立命館大学を卒業して同志社大学三年に編入しようということにした。

「人は自分のすべてを捨てて神に従うという。しかし私には、捨てるものは何もない。私は行く所がないから神様の所に行くのです。神

さん、すんまへん」

一九六三年二月二十七日の日記である。

編入試験の合格発表の日、明徳館に見に行つた。広い部屋に模造紙で合格者の名前が書き出されていた。ない。私の名前が書かれていなかった。不合格だったのである。悔しいとか恥ずかしいとか言う気持ちはなかつた。私の心はずごく静まっていた。静かに自分と向き合つて、御所の中を歩いていった。額突いて折つた。

「神様、ありがとうございます。どうか今日を私の牧師になる入学式にしてください。もし合格していたら、鼻持ちならない牧師になっていたかも知れません。どうか、人の弱さの分かる牧師にしてください。」

ちやうど京都市の中学校で、理科の教師が必要とされていて、花山中学で働くことになった。この一年が勉強の上でも経済的にも準備の期間となり、とても有意義な期間となった。

次の年やつと合格させてもらい、入学式を迎えた。教授たちとの面接があつた。

「あなたはどうして、同志社に来たのですか」何人か並んで次々と聞かれていた。私はこう

答えた。

「はい、私が牧師になると、これだけの日本のキリスト教会が変わったと言われるようになるために、同志社に来ました。」

何人かの教授が、「ぶっ」と失笑されたように見えた。ここで私は、すごい牧師になってやるぞ、というようなつもりはなかった。ただ、神様が私のような者を牧師にされるなら、きっと何か日本のキリスト教会に役に立つように用いられるに違いない。私はその神様に忠実に従って行こう。たとえ理解されなくても、それをここで言うておくことに意味があると思ったのである。

同志社大学、大学院と学んだことは本当に大きいものがあつた。それは何より人間に出会つたということだ。さまざまな呪縛から解放された事により、自分自身も含めて、隣人としての人間が見えてきたということである。同志社にはそんな天使がいっぱいいてくれた。おかげでこの時から私の頭は霧が晴れたようにはっきりと良くなったのを自覚している。学問的にも学ぶということの面白さを、身に付けられた。

私の場合は、人間の行為としての歴史と、

神の支配、このテーマを与えられて学校を出た。それは時間が経つにしたがつて、身が着き骨が太くなつてきたように思う。

北海道から新潟まで

卒業して札幌へ伝道師として赴任し、二年間いたことになる。ここでも失敗や迷惑のかげどおしだつた。ぶどう酒の無くなつたことは、一度や二度ではない。その都度素晴らしい体験をさせていただいた。たくさんの人と出会い、多くのことを学んだ。そして五年前から新潟の敬和学園高等学校に呼ばれ、校長として働いている。高校生たちと付き合つていて、自分の子供というより弟や妹たちのような気になる。生活指導で叱られていたりすると、自分も一緒に謝りたいような気になつたりしてしまう。

私は今も「そこそこ」でいいと思ひ続けている。しかし「そこそこ」ができないのである。仕方ないから悶えながら神に頼つて努力する。気が付いたら、大きな働きをさせられていた。人より優れたところなど少しもない。むしろ「のんきな」欠陥人間である。

そして分かつたことがある。水をぶどう酒に変える方の言葉を聞くかどうかだ。神様の

言葉を聞いて水をくんでいればいいということだ。物覚えが悪いとか、物忘れがひどいというようなことは、その人の頭の善し悪しとは関係ない。正確に早く、沢山のことを記憶できるということは素晴らしい能力である。しかし人間の頭脳というものは、それだけでは計れない。もつと決定的なことがあるようだ。それは神を畏れることだ。それを伝え、そちらにベクトルを向かわせることが教育の仕事だと思ふ。

同志社病院と京都看病婦学校

——平安建都千二百年記念 医療文化祭開催に当って——

半井英江

(一九五八年 文学部卒
医療文化史サロン協賛会運営委員長)

この山紫水明の地「京」に都が定まって千二百年になります。

今、京都の街には、「伝統と創生」、「未来を創る世界の京都」へを標語として、財団法人平安建都千二百年記念協会に協力する種々・多数のイベントが、展開されています。

私達の医療文化史サロン協賛会では、この(財)平安建都千二百年記念協会と共に、昨年の創生展に引きつづいて、健康都市京都に相應しい医療文化史の面から「医聖堂祭人について」、「同志社病院と京都看病婦学校」及び「ワルシャワの Hagiwara Avenue を偲ぶ」を特別展示とし、来る十一月一日から三日間、平安遷都・造都の功労者、和氣清麻呂公と、

慈善事業の実践者、姉の広虫姫をおまつりしてある護王神社の護王会館を会場として、記念展を開催致します。

いにしえより人々は、身体を養うことと心を養うことの二つに努力を重ね、医療と宗教とは、互いに密接に連携を保ってきました。

古くからの都としての京都には、神社、寺院、キリスト教会などの宗教施設が、医療関係の史跡でもある場合が多く、心のふるさと京都は、また、医療文化のふるさとでもあります。そして、毎日どこかで、医療思想にまつわるお祭りがあります。

十一月一日には護王神社で、生命力を強化し、病魔・病魔を防ぐ亥子祭が、また、二日

と三日には、会場近くの四大医祖―大巳貴命、少彦名命、神農およびヒポクラテス―を祀る薬祖神祠(二条通烏丸西入ル)で、薬祖神祭が行われ、両日には薬師如来像も掛けられ、資料展示室も公開されます。

亥子祭、薬祖神祭、記念展「医療文化史サロンの」三要素を合せて、「医療文化祭」と銘打って、身近かな医療文化史を楽しく学んでいただける機会を皆様方に提供致します。

展覧会「医療文化史サロン」は、昭和六十年以来八回つづいた護王展を基盤に新しい展開を意図して企画されましたので、「一堂に道の会せり 神、佛、医、書画、歌の道、茶道、花道」と讀えられた護王展の特徴を受けついで、書画、書籍、拓本、薬用植物、木工、折紙、花結びなど心潤う展示や、亥子餅と抹茶の接待もあります。(入場無料)

新しい展開とは、和氣氏の平安文化に関する功績が、学術・宗教・教育・医療・福祉にわたっていることから、一宗教法人の枠を取りはらい、平安建都千二百年を記念し、二十一世紀に向けて、昨年結成された医療文化史サロン協賛会が、これを主催することになったことです。

新島襄先生の、ひいては同志社の、近代文化に関する功績も、学術・宗教・教育・福祉にわたっていることは、卒業生の一人として私も存じておりましたが、医療の面についてはつい最近まで何も知りませんでした。

「同志社病院があつたのですか、看病婦学校も？」

「場所は烏丸通上長者町下ル西側の現在のKBSのある一画です。アメリカ最初の有資格看護婦を招いて、ナイチンゲール方式を基本とする近代的看護教育を行ったのです。アメリカに於いても、初期の看護教育に大きな足跡を残したリンドンダリチャーズが、かつて日本の京都で五年間も教育に当たつたと聞いた人は、皆感激しますよ。それに、リチャーズについてスミスとフレーザー、三人ものアメリカ人看護婦が、来日して指導したことは、注目すべき事なのです。」

「京の医史跡探訪 (A Guided Walk into the History of Medicine in Kyoto) 思文閣出版」の著者、杉立義一先生から、はじめて教えていただきました時は、私も感激致しました。実習病院と看病婦学校から創められて、うまくいっていたなら、今の同志社大学に医

学部も薬学部も出来ていたかも知れないなという想像も、ひろがりました。

杉立先生を私にご紹介下さいましたのは、護王神社の有田宮司様で、平成元年のごことでございます。その秋、宮司様が先生に「和氣氏と日本の医療」と題する講演を依頼なさいました折、私もその場に居りました。杉立先生は、京都医学史研究会の会長であり、私の入会を承認して下さいました。平成三年には日本医史学会へ、同四年には医道顕彰会へ、入会させていただくことが出来ましたのも、杉立先生の御紹介に依ります。

日本医史学会で、『同志社百年史、通史編一』の第一部第十一章「京都看病婦学校と同志社病院」を執筆された長門谷洋治先生や、京都府医師会編「京都の医学史の第八篇第五章」同志社病院と京都看病婦学校」を担当された指宿照久先生にお出逢いする事が出来ました。

さて、病院と看病婦学校が同志社に設けられましたのは、新島襄先生の医学部創始の構想にアメリカンボードの宣教医ベリー先生が協力された結果であり、明治十五年に相談されて以後、具体的な動きが続き、大村達斎氏の洞酌医学校との提携案などもありました

が、この件も破談となつてしまいました。

新島先生は明治十七年四月からヨーロッパ、英国を経てアメリカへ十四カ月にわたつて募金活動を行つて明治十八年十二月に帰国され、ベリー先生も一年半にわたつて帰米し、募金活動をされましたが、アメリカンボードの本部を説得できず、医学校設立は中断されました。「医学校を、東京遷都以後重要性を失つて一地方都市となつてしまつた京都に設置することに反対する」という意見が出たり、資金も足りず、もとより病院や医学校を創立することが困難な時代でした。

新島先生とアメリカンボード、ドクターベリーとの関係について、指宿先生や長門谷先生の記述から抜き書きさせていただきます。

新島先生は二十二歳で脱国してより、十年余の滞米中に、帰国してからの自分の仕事はキリスト教にもとづく新しい教育に携わることにより、日本の開化を推進していくことと思ひ定めておられました。明治七年帰国直前に、アメリカンボード American Board of Commissioners for Foreign Missions の第六十五回年会に出席して挨拶の機会を与えられ、その際に日本にクリスチャンカレッジを

つくりたいと熱弁をふるい、会衆から五千ドルの資金の寄付を受けられました。

「ここで留意すべきは、新島はアメリカカンボードの宣教師の任務を帯びており、当時この派の勢力が強かった神戸を任地と定められていたこと、およびアメリカ滞在中に帰国後の協力をうながす手紙(明治七年一月一日付)を神戸・大阪在住の宣教師八名の連名で受けとっているが、ペリーが筆頭で署名していることである。ペリーと新島は同僚であり、新島の帰国以前にすでに兩人の間につながりができていたわけである。」(京都府医師会編・

京都の医学史より)

「ペリーはかねてより看護婦の専門教育の重要性を説いてきたが、当時のわが国ではこれに耳を借すものはなかった。このことを内務省衛生局長与専斎に訴えたところ、さすがに彼はこれに直ちに賛意を表し、大日本私立衛生会(会長は長与自身)京都支部長半井澄に紹介した。一八八六年九月二〇日、同支部総会でペリーは彼の考えている看護婦、その教育についての講演を行った。この内容は今日でも新鮮さを失っていないと思えるほどの出来で、彼の執念が感じられる。この会に

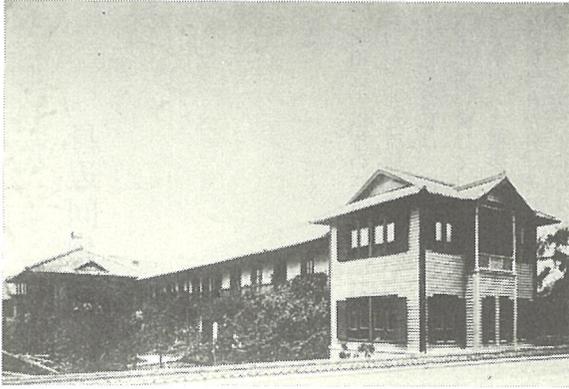
は長与も特別に出席し、全文はパンフレットにして全国の衛生会支部などに配布された。」「ペリーがアメリカで医学校建設のために集めた資金は病院と看護婦学校に用いることとなり、現地で顕微鏡や骨格標本、治療器具の調達などを行なっている。学校に派遣の看護婦として、一八八五年五月に当時ボストン在住のリチャーズ(Linda Richards)を推薦しているが、この要請が容れられ、彼女は一八八六年一月に来日することになる。」(『同志社百年史』より)

病院および看護婦学校の設立出願は明治二十年七月、認可は八月、開業式は十一月十五日である。しかし、仮診療所および学校の授業はアメリカカンボードの宣教師デイヴィスの邸宅を利用して明治十九年九月には始められていた。明治十九年に新築完成した護王神社で、百数年前の様子を偲んで下さい。場所もすぐ近くで百米も離れておりませんから)建物物は明治二十年春に着工、夏に完成、式典は十一月十五日で約五百名参会の盛大なものであった。式典に先立ち建物を公開したところ、三千余人が訪れたという。当時京大病院はまだ設立されていないので、療病院(今の

府立病院)につぐ新式病院であった。また日本 の正規の看護婦養成施設としては最初ともいわれたが、明治十八年に授業を開始した有志共立東京病院看護婦教育所(現慈恵医大高等看護学院)について二番目であった。

病院の活動は外来が月・水・金に行われ、毎週百二十人以上が受診し、半年で三千人以上となった。入院患者は十六名の疾病分類が示されている。この頃のスタッフは、校長が新島、教師兼院長ペリー、教師兼看護婦長リチャーズ、教師バツクレ(同志社教員となる夫と共に明治十九年十一月来日)、白藤(児玉)信嘉(ミシガン大卒の米国ドクトル)、川勝原三(東京医大卒、明治二十一年一月まで在職)、病院助手堀俊造であり、リチャーズの助手としてガードナー嬢の名があがっている。学校と病院は同一敷地内にあり、別棟となつてはいるけれども、スタッフは病院助手一名以外は共通であり、ほとんど同一組織と考えられる状態であった。

明治二十三年一月、学校と病院の強力な推進者であった新島が他界し、新島なき同志社についてはアメリカカンボードと衝突し、明治二十九年には、外人医師、外人婦長の時代も終



京都看婦学校（1887・明治20年11月開校）

る。同二十六年十一月、病院・学校は成績が上がっていたが、ペリーは離日した。教育勅語発布後の国粹運動、キリスト教への圧迫、新島の死亡による同志社幹部との疎遠などの理由もあったと思われるが、ペリーは日本でも近年医師の専門化がすすみ、外人教師は過去の功績にかかわらず、一つ間違えば批判の

対象となることをあげている。

京大病院が出来た後の明治三十四年の患者統計でも第三位で私立病院の筆頭である（官公立五、私立十九のうち）。さらに佐伯理一郎が院長である三病院すなわち同志社病院、佐伯病院、京都産院の患者数は合計で二万人（年間、入院外来合計）を越えて私立病院の中では群を抜く数となる。

佐伯理一郎はペンシルバニア大学での学業を終え明治二十四年七月ヨーロッパを経て帰国、京都に来て同志社病院に就職し、産婦人科の診察と京都看婦学校の講義を担任した。それ以後、昭和二十八年五月に没するまでの六十数年間、京都のみならず日本の医学界に大きな足跡を印した。彼には産婦人科医師としての一面と教育者としての一面とがある。産婦人科学会の発展に寄与し、わが国現代看護の黎明期に三千名を数える看護婦・助産婦をおくり出した医学的・社会的功績は極めて大きかった。これらの診療と教育の基礎にあったものは、明治十七年に受洗（二十三歳二月新島襄の説教を聴く。三月小崎弘道より洗礼を受ける）して以来のキリスト教者としての信仰であり、それは京都産院の施療と

看護婦学校の校是にもよくあらわれている（受るよりも与ふるは福也）。

明治三十五年五月、同志社は病院および学校の管理を佐伯に委ねた。彼は院長および校長として経営に当たった。同三十八年、同志社病院はついに閉鎖された。同三十九年、この頃、看病婦学校存続のため、同窓会代表不破（北里）ユウらが奔走。彼女は新島襄が校長として、その卒業式（明治二十二年）にのぞまれた二期生で、明治三十二年に開設された京大病院の初代看護長に就任し、大正四年まで在職して活躍したが、学校存続のために情熱を傾け、学校は佐伯理一郎の管理下に昭和二十六年まで存続した。

この学校の創設、運営、教育に努力された同志社内外の人々に共通する宗教心と愛のエネルギーが、いかに大きいものであったかを思わずにはいられません。（元）

身辺回想

昭和三十二年の四月以来、満三七年に亘って勤めてきた琉球大学を今年の三月末に停年で退職した私は、四月以降も非常勤の身分で大学に通い続けてはいるが、これまでの教授会や学内の各種委員会へ出席する煩わしさから解放された分、それだけ気が楽になり、また、ひとつには年齢のせいでもあろうか、この頃、過ぎた昔のこと、自らの来し方に想いを回らす日が多くなった。

新詩社の鉄幹・晶子夫妻に師事し、啄木らとも交友があったといわれる、沖縄の代表的な歌人・山城正忠(号は尋牛)は「朱の瓦 屋根の糸遊 春の日に もの皆よろし わが住める那覇」と詠んでいるが、この那覇讃歌は

幼少の頃の小学校の想い出を私の身近に引き寄せてくれる。

私は昭和四年二月の早生まれなので、十年の四月には那覇市立の小学校に入った。子供の足でも家から五〜六分、市内の一角の閑静な住宅地域の高台に建つその学校の木造の校舎は南国の榕樹や梯梧に柔らかく囲まれ、沖繩の伝統的な焼瓦で葺いた屋根が木洩れ目を浴びると、薨の朱の色は尋牛の詠嘆そのままにひときわの輝きを増して、四周の木々に美しく照り映えた。

しかし、歌人の豊かな詩情に結び付いた私の小学校への慕情も、相前後する時期への今ひとつの追憶——その頃すでに忍び寄ってい

我喜屋良一

(一九五五年文学部社会学科卒
琉球大学名誉教授)

た「非常時」への回想——に搦められて、敢えなく消え失せてしまう。

柳条湖事件が発端となった「十五年戦争」は昭和六年の満州事変ですでにその幕を切っていたが、私の記憶に残る初めての戦は、昭和十二年、小学校の三年に上がった年の七月に起きた「支那事変」であった。後年、日中戦争と呼び直されるようになったこの戦では、初めのうちこそ、私は南京陥落や漢口陥落などで戦勝気分の高揚を大人に交じって旗行列や提灯行列に付き合わされたり、書道に心得のある伯父(母の兄)が町内の出征兵士の家の門前に立てる祝賀の幟書きを一手に引き受け、得意顔して腕を揮うのを傍で見たりしていたのであるが、そのうち、事態は次第にさし迫り、上級生になった昭和十五年から十六年の初めにかけて学校代表で校旗を先頭に毎月ほとんど那覇港に出かけ、埠頭のデッキから下ろされた白木の箱のなかの英霊を岸壁の近くに俄作りした祭壇で迎えた時には、子供心にも小さな胸を痛めたものである。そのような「非常時」のなかで、私は昭和十六年の三月にこの小学校を卒業した。「国民学校」になる前の、最後の「尋常小学校」の卒

業生としてである。

その年の四月に入学した「中等学校」の制服は「国防色」と称するカーキ色一色に統一され、頭に戦闘帽、脛には巻脚絆の出立ちでの通学となった。同年の十二月、日本のハワイ真珠湾攻撃で火蓋が切られ、これもまた戦後太平洋戦争に改称された「大東亜戦争」は軍国少年にされた中学生たちを陸士、海兵、幼年学校、予科練へと誘い、三八式の歩兵銃を担いで軍ごっこをする「教練」の出来が教科全体の成績評価に物をいう時代となった。昭和十八年六月、帝國政府は「学徒戦時動員体制確立要綱」を定めたが、その翌月、南方方面の視察の帰途、沖縄に立ち寄った東条首相を宿泊先のホテル近くの沿道で「頭右」して表敬するため、那覇市内と近郊の中学生が総動員されたのは何とも皮肉なことであった。序でに付け加えると、この陸軍大將は滞沖中、県工業指導所で沖縄の伝統工芸品を見て、「このような華美なものが戦争とどう関係をもっているか」と訝しげに質問し、県民にファッショ体制の厳しさを印象づけたといわれる。右の要綱に基づくものであったか、その頃から沖縄の中学生たちは連日のように戦

争完遂のための勤勞奉仕に追い遣られて、次第に本務の学業からは遠ざかって行った。記憶の糸を辿って、私が直接に関わった作業を思い出してみると、出征兵士の留守家族、とりわけ農家の砂糖黍の刈り入れの手伝いに始まり、製糖工場での粗糖造り、小禄飛行場（現、那覇空港）を初めとする各地飛行場の拡張・整備、さらには高射砲陣地の構築や戦闘用壕掘りなどに至るまでが次々と脳裡に浮かんでくる。

翌十九年十月十日、米軍は南西諸島を目標とする最初の空襲を行い、当日の早朝から夕方まで、ほぼ一〇時間に亘って、奄美大島・徳之島・沖縄本島・宮古島・石垣島・大東島などを艦載機グラマンで攻撃した。この空襲で航空・船舶基地・県庁・市役所・学校などの公共施設の損壊はもとより、民間側も多大の損害を被り、とくに私の家族を含む那覇市民の九割方が家屋・調度の一切を焼き尽され、死者も一五〇〇人に及ぶ惨事を生んで、後年の郷土史に「10・10空襲」の名を留めたが、それはまた、明けて昭和二十年に太平洋戦争の終幕を演じ上げた沖縄戦の前哨戦ともなったのである。余談になるが、これより少し前、

私は陸軍士官学校に合格していたけれども、当時、制空権はすでに米軍の手に握られていたために、本土への渡航を断念せざるを得なかったのである。

昭和二十年三月末の慶良間諸島への上陸に始まった沖縄戦では一七歳から四五歳までの一般県民男子が「防衛隊」として召集された。男女中学生も「学徒隊」として動員され、男子は「鉄血勤皇隊」、女子は「従軍看護婦」に採られて戦闘に参加し、その多くが「護郷隊」や「ひめゆり学徒隊」に代表されるような悲惨な最期を遂げた。私の同期生も三〇教名が戦死し、私自身も両下肢に四発の小銃弾を受けて出血多量で人事不省に陥ったところを米兵に救われ、米軍の野戦病院に収容されて九死に一生を得た。

戦塵はれて沖縄側の病院に引き取られてからも私は病床生活に明け暮れ、翌二十一年の春先に退院するまでの一年近くを反側も儘ならぬままに無聊の毎日で過ごしたあと、縁あって、ノグチゲラやヤンバルクイナで知られる沖縄本島北部のある「初等学校」に「教官補」とし職を求めることができた。戦争で灰燼に帰した集落の入口に父兄が手作りで建

てた茅葺の校舎には昔日の那覇の小学校の面影を偲ぶよすがもなかったが、子供たちの躍動する四肢と輝く瞳を目のあたりにした私は改めて暗くて長いトンネルを抜け出したような気分を味わい、生き延びたことの喜びを実感することができた。

昭和二十一年一月に本島中部の具志川村（現在は市）に戦後初の教員養成機関として開設された沖縄文教学校の外語部が程なく沖縄外国語学校として分離・独立し、両校は追って二十五年創立の琉球大学へ吸収・統合されることになるが、私は二十三年の秋、先述の初等学校に籍を残したままで外国語学校の「中等学校英語科教員養成科」に第一期生として入学し、翌年の卒業に際して沖縄民政府から「教官」の免許状を交付されたあと、同じ初等学校に併置された「中等学校」で英語を担当するようになった。

昭和二十六年四月、米国民政府から派遣された「契約学生」として本土の大学で社会学を専攻することになったが、その前後の経緯と同志社の大学院を修了して琉球大学に赴任し、爾後も数々の御縁で母校と関らせて頂いていることについては、「私のな

かの同志社」（昭和六十年三月『同志社時報』No.78）で紹介済みなので、そのあたりの再述を避けて、今回は琉大就職後の動向をかいつまんで記してみたい。

同志社大学院文学研究科社会学福祉学専攻課程を修了して私が琉球大学の文理学部社会学及経済学科に職を得たのは冒頭にも記したように昭和三十三年四月のことで、この複合学科の教授陣は、大方、経済学関係の教官で占められていた。三十三年の新学期から同学科は社会学と経済学科に二分され、私の所属する社会学は社会学プロパー・社会学社・マスコミのそれぞれを受け持つ三人の教官と新入生七人の規模でスタートした。学生数は兎も角、この組織は私の進言で母校同志社大学の社会学科のそれをそのまま採り入れたものであった。昭和三十五年頃から、私は学内での講義のほか、小中学校教育職員の現職教育のための校外普及講座にも加わる一方、琉球政府立の看護学校でも社会学福祉学や社会学を担当するようになった。同じ頃から行政機関にも関るようになり、これまでに琉球政府、沖縄県の社会学福祉や医療保険関係の各種審議会・協議会・懇話会の会長や委員を

務めてきたが、この間に民間社会学福祉団体との絆も強まり、県社会学福祉協議会や共同募金会を初め、社会学福祉事業団、長寿社会振興財団などの評議員や理事を委嘱され、公民あわせた役職は毎年一〇指を超えるようになった。昭和四十年あたりになると本土復帰の機運が高まり、四十一年七月には大学の看板も米国民政府の「布令立」から「琉球政府立」に書き替えられ、四十二年四月に従来の文理学部は文系と理系に分かれて、社会学科は法学部部に組み入れられた。その頃から、沖縄の社会経済諸制度の改変が本土とのいわゆる「一体化」の潮流のなかで進められ、復帰前後の数年間には琉大も国立大学移行の大きな課題を抱え、私自身もたまたま昭和四十七、八年度には評議員の一人として、学部・学科の改編・教職員の処遇などを巡る文部省との詰めの仕事や、さらには時を同じくして激化した学生運動への対応に大童であった。

法文学部が首里城跡のキャンパスから中部西原町に移ったのは昭和五十六年三月のことで、理工系より多少遅れた。新キャンパスは医学部の敷地を併せるとほぼ一三〇万平方メートル（約四〇万坪）で国立大学のなかでも指折りの

広さといわれる。その後も琉大の学部・学科は時運に沿ってしばしば全学的な改組をみてきたが、最近では平成五年十月の政編により、設立当初の社会学科（後年の社会学専攻）は人文学科のなかの地域・社会科学系（講座）として位置づけられるようになった。また、全国的な高齢化社会の到来に伴い、文部省からも社会福祉関係の学科目の増設が認められ、五年度現在で社会学専攻は教官一人、入学者五六人を擁するまでに成長しており、草創期と比べて今昔の感に堪えない。

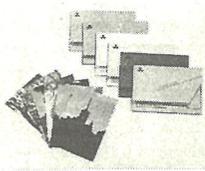
琉球大学在職三十七年、その時々には長くも思われたが、今、顧みると、日子は真に短く、歳月はまさしく「駟の隙を過ぐるが如し」の古諺そのままに疾駆して走り去った感が深い。「教えるとは共に希望を語ること、学ぶとは真実を胸に刻むこと」——ルイ・アラゴン「大学歌」の含みを、私はこの歳月のなかで果して何程に生かすことができたのだろうか。

郷愁を綯い交ぜた幼少の頃の学舎への思慕に始まった私の回想はただ思っただけが先に立つて意を尽せぬ駄文に終ってしまったが、このあたりで同志社の限らない発展と校友・関係者各位の弥栄を切に念じ上げて筆を擱きたい。

同志社の絵葉書シリーズ発行

茜色の雲に映えるクラーク記念館、淡雪の積もる良心碑、桜花欄満の啓明館（旧図書館）、大文字の送り火を背にする栄光館など、多くの校友・同窓が在学中馴染れ親しんだ「今出川キャンパス」の四季折々の風物および「田辺キャンパス」の雄大な建物群を紺碧の空をバックに捕えたものおよび新島先生の肖像画遺墨などを、それぞれ六枚一組にして発行しております。

- 重要建築物シリーズ
 - 新島襄の面影シリーズ
 - 大学今出川校地シリーズ
 - 大学田辺校地シリーズ
 - 女子大学今出川校地シリーズ
 - 女子大学田辺校地シリーズ
- 定価各シリーズ六枚一組二百五十円



●購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。
●代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

発行 同志社収益事業課
京都市上京区今出川通烏丸東入
電話（〇七五）一二五一—三〇三七／八

新島襄が学んだアメリカ

——北垣宗治著『新島襄とアーモスト大学』断想

河野仁昭

(史資料室長)

新島襄が亡くなって一〇〇年を超えた。その全集の刊行も手伝って(まだ残念ながら完結してはいないが)、近年とみに新島研究が加速した。その成果が同志社教育にどう反映しているか、あるいはせしめようとしているか、はともかく、研究の稔りはよろこばしいかぎりである。

こうした稔りの中で、わたしが知る限りでは、アメリカ時代の新島に関する調査・研究が手薄だった。理由の一つは、その時代の新島の資料が不十分で、かつ活用できる状態になかったことにある。

手薄だった部分を埋めてくれた一冊は、井上勝也文学部教授の論文集『新島襄一人と思

想』(晃洋書房、一九九〇・二)である。これは『新島襄全集』第六巻—英文書簡編(同朋舎、一九八五・一〇)や、あとでふれるA・S・ハーディー編著『新島襄の生涯と手紙』(『新島襄全集』第十巻、一九八五・五)と共に、まさに干天の慈雨であった。井上教授は昭和五十二年度の一年間アーモスト大学へ在外研究され、その期間中、アメリカ時代の新島発掘に身魂を傾注されたのである。

北垣宗治先生(名誉教授もしくは敬和学園大学学長とお呼びすべきかも知れない)の論文集『新島襄とアーモスト大学』(山口書店、一九九三・一二)が今回加わったことによつて、アメリカ時代の新島襄とその周辺は、よ

り鮮明になった。立体的にもなった。お二人のご本の比較はあまり意味がないことなので、両先生は相互に影響しあつたというにとどめさせていただく。

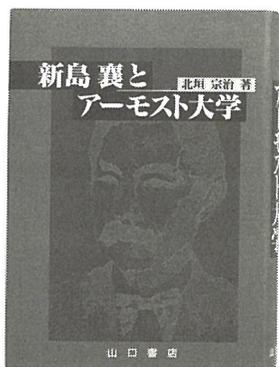
北垣先生の新島研究は、同志社大学に入學され、オーテス・ケリー先生が館長だったアーモスト館に入ったときに始まるといつてもいい気がするが、このたびのご本を拝見する限りでは、『脱國の理由』の英語(『日本英学史研究報告』一九六六)が最初の業績である。そのころ同志社は創立九十周年記念事業の一つとして、『新島襄全集』の編集・出版を企てていた。その一冊に加える予定だったのがJ・D・デイヴィス著『新島襄の生涯』で、翻訳を北垣先生が担当されたのである。全集の刊行が実現しなかつたこともあつて、それは同志社校友会が同志社創立百周年の記念として、昭和五十年十一月に出版した。二年後に小学館からそのリプリント版が出、現在は改訂増補されて同志社大学出版部から出ている。

北垣先生の翻訳はそれにとどまらなかつた。A・S・ハーディーの『新島襄の生涯と手紙』がそうであり、今回のご本に収録され

ている「マツキーン『若い日の新島襄』」がそうである。英文で書かれた新島伝の古典は、三冊ともに北垣先生によって、よくこなれた日本語に訳された。

このお仕事と並行してなされたのが、『新島襄とアーモスト大学』に収録されている二十八編の論文あるいは講演記録である。翻訳書と合わせれば、北垣先生の三十年にわたる新島研究の集大成、ということになる。

ご本の内容を逐一紹介させていただく紙幅はない。わたしにとって興味ぶかくなかつ有益だったのは、やはりアーモスト大学に関する部分で、これが、J・H・シーリー教授夫妻、



(山口書店・発行一九九三年十二月)
A5判・六四四頁 六〇〇〇円

ルームメイトのW・J・ホランド（ホランドが両親に送った手紙は北垣先生の発見）などを含めて本書の核をなしているというのが、わたしの印象である。

これに、最初の新島伝の著者P・F・マツキーンとその姉、アメリカン・ボードのN・G・クラーク総主事に関する研究、新島がよく手紙を送った四人のアメリカ人女性のことなどが関連しあう。北垣先生のアプローチは人間への興味、関心がパネになっている。一人新島に対してのみではない。しかも銜学趣味がおりでないから、研究論文というよりはむしろ文学書を読むような親しみがわいてくる。翻訳されたものもそうである。

このご本の看過しがたい特質の一つは、収録されている「アメリカ研究としての新島研究」に表明されている視座である。新島研究を手がけはじめられたときからの認識がありだつたわけではないようだが、最初に発表された新島研究が『日本英学史研究会報告』であったのは、わたしには興味ぶかい。アメリカ研究と日本英学史研究が、ときに分離し、ときに重なりあう、それが本書の特色なのである。

正直のところ、外国語音痴のわたしは、二つの学問ともに詳しく語る用意も資格もない。だから的外れな願いかもしれないが、新島襄が感化を受けたニュー・イングランド神学、カルチャーショックを覚えた文化、生活した自然や風土（新島はそれらに対して非常に強い興味を示している）へと、研究がさらに広がりをもつに至ったら、そしてそのアメリカを新島および宣教師その他が、どういったかたちでこの国に持ち込み、移植しようとしられない。もちろんお一人でやられることには限界がある。ないものねだりをするつもりはいささかもない。ただ、このご本はそういう思いをかき立てる、そういう意味でも極めて刺激的だということをいっておきたいまでである。

同志社、そして京都への思い

照井孝保

(一九六六年経済学部卒
岩手県教育委員会事務局)

憧れは現実には直面すると、半減したり失望に変わることが多いのではないのでしょうか。

しかし、「同志社」の場合はその逆でした。私の場合、創立者新島襄先生を慕ってということではなく、ある企業から求人があるということ、神道系の大学から編入させて頂いたこと、同志社に入って最初に驚いたのは語学教育の水準の高さでした。三年次にも外国語科目を履習したのですが、担当の中山末喜先生の、テンポが早くしかも明快な解説の講義には驚き感服してしまいました。なししろ一時間に五ページ位は進んでしまうのですから復習も十分で「可」を頂くのがやっとのありさまでした。ミッシヨン系の大

学(一般的表現)は語学教育が充実しているとは拝聴しておりましたが、聞きしに勝るものでした。

専門の経済学の分野の講義でも、水準の高さは尋常ではなく、「経済原論」の中島哲人先生の理路整然として、かつ自信に満ちた講義は印象的でした。同じく「経済原論」の若き渡辺弘先生の講義は、私の学力不足から理解できない時が屢々あり、たまたま先生の研究室にお伺いし、その折、懇切丁寧なご指導を頂いたことがありました。感謝!! しかし、それ以上に先生が机上のノートに何やら一杯数式を書いておられ、真剣に考えておられたお姿が忘れられません。私は怠惰な気持ちに流

されようとする時、その時の先生を想い出し、励みとしております。

そればかりではありませんでした。同志社の素晴らしさは社会人になってから一層強く認識させられたのです。

在学中、住谷総長先生の講義で社会問題に目を開かされた私は、一転、地方公共団体に入って「労働問題」を追いかけてきているのですが、色々調べていくうちに住谷総長先生が改造社版の『マルクス・エンゲルス全集』の訳者の一人であることを発見し、先生の偉大さを改めて認識させられました。又、労働問題の研究者なら避けて通れないといわれるパールマンの『労働運動の理論』を訳されたのは、あの松井七郎先生だったのか、と身近にいらした先生が急に大きく感じられました。

その外、社会政策、労働者福祉論、社会保障等の分野だけでも、西村豁通先生、嶋田啓一郎先生、角田豊先生、小倉襄二先生等、同志社の先生方の著書が岩手の図書館にも沢山あり、遠く離れてしまったあとで同志社が「宝の山」だったことに気づいた次第でした。

その「宝の山」はこれから少しづつ掘っていくこととし、本山の同志社に対する私なりの思いを述べてみたいと思います。

多くの大学が新しい学部を増設を計画している昨今ですが、岩山学長先生の構想は、「総合政策科学研究科」の新設など大学院の充実を第一に考えておられるご様子、内外の期待に応える適切な措置であろうと存じます。

それは、私などが申し上げるまでもないことですが、二十一世紀を目前にして、今、科学技術の発達による恩恵を享受する反面、環境破壊が憂慮されるなど、諸々の問題について、より高く世界的視点での分析、判断が求められてきており、学術研究水準の高度化、学際化は当面の緊急課題であろうと思うからです。従って、附属の研究所と共に、学術研究の重要な機関である大学院の充実は誠に当を得た施策であろうと思われまします。しかも、「牽引力期待される関西の雄」(一九九三年二月五日号『週刊朝日』栗本慎一郎先生明記)の同志社であればなおさらのことと存じます。又、学部の増設が必ずしも成功とばかりは言えない結果となっていることは、関東の著名な大学といえども例外ではないと思われ

ます。しかも同志社は「学芸」と「家政」を含め八学部を擁していると私は受け止めているのですがどうでしょうか。

ただ、工学部だけは、明治時代の教育関係者が理学を重視していたことに鑑み、できれば学科を増設し「理工学部」として充実、発展させて欲しいと願っております。

又、わが国の学生諸君はキャンパスが市街地にあり、交通が便利であることを志向しているように思います。それは例えば、八王子に新設、移転した大学の人気がいまひとつであることをみても明らかです。

そこで、同志社、田辺キャンパスも「遠隔地」という印象を払拭する戦略が必要かと存じます。幸い将来、リニア新幹線が精華町付近を通過するという構想があるようですが、その際、①停車駅を確保すること、②近鉄奈良線と接続させること、③駅名は「新京都」とすること、が肝要ではないかと思えます。

特に②についてはJR西日本としては、JR奈良線と接続させたいところでしょうが、①京都―奈良間の運行本数がJR五十三本に対し、近鉄六十三本と近鉄の方が多く、利用者にとって便利である。④関西文化学術研究

都市の東部の研究地域が近鉄沿線にある、といった理由から、大局的にみて近鉄奈良線との接続がベストではないかと思うのです。

ついでに申しますと、田辺町は市制施行にあと一步で、新しい都市の名前をどうするか議論されていると拝聴しております。この点につき差し出がましいとは思いますが、京都府南部に位置していることと、京都のブランドを利用し、京都のエリアを拡大するという意味で、新しい都市名は例えば「洛南市」などというのはいかがでしょうか。

そして、同志社のキャンパスも「洛南キャンパス」と改称されるなら一層のイメージアップになると思うのです。

こうした政治的折衝や運動はなかなか難しいことと思いますが、ここは「同志社の顔」であり、各方面に多彩な人脈を持つておられる松山総長先生と、校友を代表し、産業界の立場も説明できる異校友会長の御両所の手腕に期待し、ご尽力をお願いしたいと思っております。

次に「京都」への思いを述べてみたいと思います。同志社が京都にある以上、同志社の

将来は京都の将来と不可分の関係にあると思うからです。

時あたかも建都以来千二百年目の今年、数々の提言がなされたことと思いますが、この際二つの提案をさせて頂きたいと思いません。

一つは、評論家の江坂彰先生が一九八九年九月号の月刊『プレジデント』誌上で提言しているように、イタリアのローマに倣って、「JR京都駅を狭んで北側をオールド・キョート、南側をニュー・キョートとし、前者は保存を主体に、後者は開発を主体に街づくりを展開」すべきであると思えます。

京都駅の北側の保存については異論は無いと思われます。問題の南側には既にいくつかの有力企業が進出してきているようですが、この地域にハイテク企業が集積する可能性は少なくないと思われます。

その訳はなにより近隣に研究水準の極めて高い、京都大、同志社大の理、工学部、そして学研都市の研究機関もあり、人的資源に大変恵まれていると思うからです。

目を東に転じてみると東京と筑波研究学園都市とは、かなりの距離があり、必ずしも

お互いが有機的に結びついているとは言えないと思われます。しかし、京都南部なら市街地からも学研都市の研究地域からもそれほど遠くありません。私は伏見から市の境界線を越え、巨椋池干拓地の付近までハイテク企業が張りつき、京都南部が「日本のシリコンバレー」(江坂先生命名)になる日が来るのではないかと期待しています。

そして、それらハイテク企業に勤務する多くの人々が、京都南部、つまり今出川と田辺の中間に居住することになれば、同志社への入学志願者数にもおのずと好影響が出てくるのではないかと予想しています。

二つ目は、京都が今日まで文化や伝統を継承しつつ、進取の精神を発揮して、時代を切り拓いてきたことは歴史を繙けば明白ですが、この記念すべき時それに倣い、京都が日本、そして世界に向けての「平等」の発進基地になって欲しいということです。

「平等」には人種や身分による差別を無くするという平等もありますが、取り分け男女差別を無くするため、「男女平等」をテーマに積極的に啓発広報活動を展開し、その実現に向けて社会的条件の整備を図り、他の都市に先駆け

て男女共同参加型の社会を築くことは、平安建都千二百年に相応しい有意義な事業と言えるのではないのでしょうか。

既に京都は長期間、革新府政の下で、平等な社会の実現を目指してきた経緯があり、この面では他の都市より一歩先んじていると思えます。

しかも、京都には現在、女子労働論の第一人者である花園大の竹中恵美子先生をはじめ、女性史研究の大御所である京都大名誉教授井上清先生、ミレット「性の政治学」の訳者の京都精華大、藤枝濤子先生等がおいでになり、わが同志社にも「均等法」の安技英評先生や、フェミニズム論の落合恵美子先生がおられ、さらに参議院議員の笹野貞子先生等、錚々たる先生方がお揃いで、スタッフに事欠くことは無いと思えます。

もし、この啓発広報活動が実り、社会的条件が整備され男女平等が実現し、女性の能力が本格的に活かされるようになれば、今でも抜群の京都の知的能力は一層増大し、京都から「女性のノーベル賞学者」が続々誕生する可能性も出てくるだろうと思われます。

又、男女の平等と併せて問題の根は同じ人

種の平等も実現されたなら、開港したばかりの関西国際空港を経由して、京・大阪に世界の、分けてもアジアの人々が多数訪れ、滞在するようにするのはないかと思われれます。

以上、京都への思いを述べてまいりましたが、元々京都は経済効率一辺倒ではなく、美しい庭園や神社、仏閣等の貴重な文化財を大切に保存し、清水焼、西陣織などの素晴らしい工芸品を今に伝えてきております。

そのように「いにしえ」からの優れた文化と、最新の科学技術や先進的平等思想とが相まって形成されるであろう新しい京都は、もしかすると世界中で最も美しく文化の香り高い、しかも裕福で住みよい都市になるのではないかと思うのですがどうでしょうか。

その中であって同志社も発展の一途を辿り、京都そして日本の学術研究、教育の重要な一翼を担い続けていくであろうと夢は限りなく膨らむこの頃です。

そして、学生時代不勉強だった私は、大いに反省して学問に励み、専門的知識と「良心」を身につけ、少しは胸を張って、若い頃京都

に住み同志社に学びましたと言えるようになりたいものだ、と思っています。

